

《対象書籍》

『春の消息』 柳美里・佐藤弘夫著 写真・宍戸清孝 第三文明社刊

本書は日本人の死生観をテーマに、福島県南相馬市在住の芥川賞作家・柳美里氏が、東北大学大学院の佐藤弘夫教授と共に、かつて飢饉・冷害・震災といった大震災に見舞われた東北各地の墓地、霊場、神社仏閣、有形・無形文化遺産などを探訪。ダイナミックな写真と濃密で本質を突いた対談、さらに柳美里氏の書き下ろしエッセイを交え、一冊の書籍としてまとめたものです。

6つのコンテンツで構成されている第一部では、地域に残る生者と死者の交歓風景を、佐藤教授によるナビゲーションと柳美里氏によるエッセイを組み合わせ、展開しています。

昨年夏から冬にかけて、青森県五所川原市の「賽の河原・川倉地蔵尊」や、「姥捨て伝説」の舞台となった岩手県遠野市のデンデラ野・ダンノハナを訪ねたり、秋田県湯沢市に今も残る「地獄極楽図」や、山形県の若松寺や黒鳥観音などにある「ムカサリ絵馬」を拝観。また、中世には納骨儀礼の場であった宮城県の松島や福島県会津若松市の八葉寺を訪れ、納骨五輪塔や板碑を見学しました。さらに東日本大震災の被災地である福島県南相馬市や警戒区域である大熊町にも足を延ばすなど、東北各県で取材を重ねた模様が佐藤教授による分かりやすい解説と、仙台在住の写真家宍戸清孝氏による迫力ある写真で紹介されています。

第二部には、佐藤教授と柳美里氏との対談を収録。聖者と死者の織りなす独自の文化の形成と定着について読み解き、未来に向けた死生観・生死観を存分に語り合い、それぞれが体験した「東日本大震災」と、その後の日々についても考察を深めています。東日本大震災から7年—。作家と学者が魂の行方を訪ねて各地を歩いた日々は、まさに、大震災を経験した東北の人々が待ち望む春を探す旅でもありました。

本書に綴られた柳美里氏による7本によるエッセイには、独自の視点で生死を見つめる感性が光っています。一つひとつのテーマの独創性と神秘性が、本書の魅力を増しています。

さらに、柳美里氏が南相馬に転居して以来、ずっと心に思い描いていた「本屋を開きたい」という夢が、ついに実現することになりました。来年の春には、福島第一原発から14キロ地点の南相馬市小高区で「フルハウス」という書店をオープンします。

柳美里（ゆう・みり）小説家・劇作家。1968年、茨城県生まれ。高校中退後、劇団「東京キッドブラザーズ」に入団。女優、演出助手を経て、1987年、演劇ユニット「青春五月党」を結成。1993年、『魚の祭』で、第37回岸田國士戯曲賞を受賞。1994年、初の小説作品「石に泳ぐ魚」を、文芸誌「新潮」に発表。1996年、『フルハウス』で、第18回野間文芸新人賞、第24回泉鏡花文学賞を受賞。1997年、「家族シネマ」で、第116回芥川賞を受賞。1999年、『ゴールドラッシュ』で、第3回木山捷平文学賞を受賞。2001年、『命』で第7回編集者が選ぶ雑誌ジャーナリズム賞作品賞を受賞。福島県南相馬市在住。

写真家プロフィール

佐藤弘夫（さとう・ひろお）東北大学大学院文学研究科教授。1953年、宮城県生まれ。東北大学大学院文学研究科博士前期課程修了。盛岡大学助教授などを経て現職。神仏習合、霊場、日蓮、鎌倉仏教、国家と宗教・死生観などをキーワードに日本の思想を研究している。残された文献の厳密な解読による実証研究をベースにしなが、石塔や遺跡などのフィールドワークを取り入れ、想像力を駆使して、大きな精神史のストーリーを組み立てることを目指している。宮城県仙台市在住。

宍戸清孝（ししど・きよたか）1954年、宮城県生まれ。1980年に渡米、ドキュメンタリーフォトを学ぶ。日本写真協会会員。1993年「カンボジア鉄鎖を超えて」（銀座ニコンサロン）、1995年からアメリカと日本のはざまで激動の時代を生きた日系二世をテーマにした写真展「21世紀への帰還」シリーズを発表する。2004年伊奈信男賞、2005年宮城県芸術選奨などを受賞。

定価：2200円（税別）

A5判ソフトカバー 264ページ

発刊日：2017年12月1日